

研究所訪問

北海道立衛生研究所

Hokkaido Institute of Public Health

北海道立衛生研究所は、昭和23(1948)年厚生省3局長通達(衛生機関の統合に関する地方衛生研究所設置要綱案)に基づき、従来の衛生試験所を改組して、昭和24(1949)年9月に職員数51名で設立されている。昭和30(1955)年には北海道立食糧栄養研究所を併合、昭和45(1970)年には北海道公害防止研究所(現北海道環境科学研究センター)の新設による公害部の廃止などをへて現在に至っている。

衛生研究所の現機構は平成6(1998)年4月に改組されたものであり、5部1室2課20科、職員数は115名である。北海道がもつ27試験研究機関の中でも規模の大きな機関の一つである。設立以来、北海道の公衆衛生に関する行政の科学的、技術的中核として、試験検査・調査研究および研修指導を行なってきた。

衛生研究所はJR札幌駅の北西約2kmに位置し(図1)、敷地面積64,733.91m²、建物規模



図1 北海道立衛生研究所の位置
〒060-0819 札幌市北区北19条西12丁目
Tel. (011) 747-2211
Fax. (011) 813-2581



写真1 北海道立衛生研究所の全景 (パンフレットより)

7,993.69m²で、北海道大学第二農場に隣接した緑豊かな環境にある。現在では“羊群声なく牧舎に帰る”の光景はみられないが、西方には手稲山の頂が望まれる。同じ敷地内には、衛生研究所とともに北海道立工業試験場・北海道立地質研究所(旧地下資源調査所)および北海道環境科学センターの北海道の4つの試験研究機関があり、通称「研究団地」と呼ばれている。

衛生研究所における温泉に関する調査研究は設立当初から取り組まれてきており、昭和30(1955)年・32(1957)年に“北海道鉱泉誌、第1編総論(第一部・第二部)”，昭和36(1961)年に“第2編分析編”が「北海道立衛生研究所報」にまとめられている。中谷省三・多賀光彦・都築俊文らによる一連の化学的調査研究は、北海道大学理学部化学教室(太秦教室)とともに、北海道における戦後の温泉研究を地球化学面からリードしてきた。これらは“北海道の温泉成分の化学的研究、第1報～第11報(1958～1970)”として、「北海道立衛生研究所報」に報告されている。

衛生研究所は、長らく北海道における唯一の温泉指定分析機関(昭和52(1977)年10月から北海道薬剤師会公衆衛生検査センターが追加されている)であり、道内の大部分の温泉利用施設に衛生研究所の「成分分析書」が掲げられている。初期の調査研究は、福士敏雄・北山正治・佐藤洋子・井上勝弘・内野栄治らに引き継がれてきた。昭和54(1979)年以降、新たな湧出地および掘削された源泉の化学的特性について、2年毎にとりまとめられ「北海道立衛生研究所報(1981～1998)」に報告されてきている。

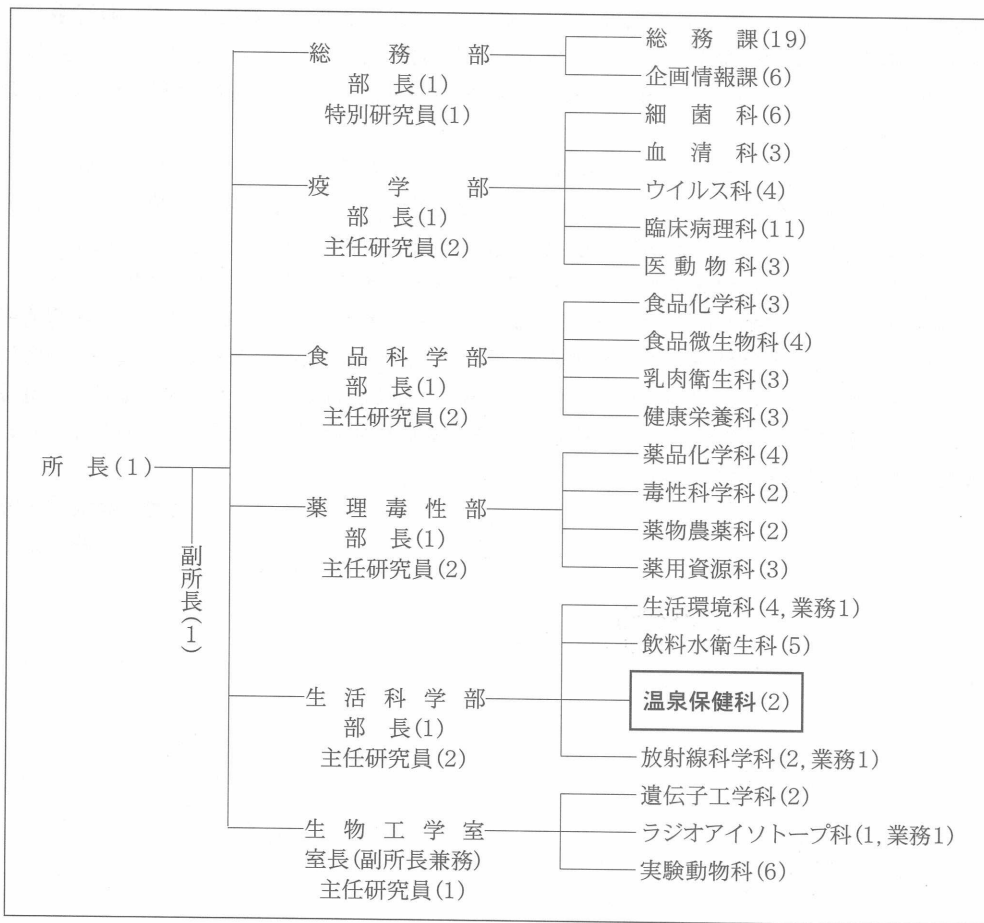


図2 北海道立衛生研究所の組織

現在、温泉部門は「生活科学部(小川廣部長)」の「温泉保健科(内野栄治科長・市橋大山研究職員)」で対応されている(図2)。従来の「鉱泉化学科」から「温泉保健科」への変更は、全国の衛生研究所の中でも大変ユニークな試みである。これは従来の化学的調査研究に加えて、温泉の保健・医療効果に関する調査研究を重視しようとの考えに基づいていると思われる。

温泉の保健・医療面に関する調査研究は緒についたばかりであろうが、すでに“健康の維持・増進を目的とした道内温泉の有効利用に関する基礎的研究、第1報～第4報(1997～1998)”として、「北海道立衛生研究所報」に報告されており、一部は温泉科学学会大会において発表されている。これらは、道内37カ所の温泉地(47施設)における療養目的での温泉利用者へのアンケート調査の分析に始まり、豊富温泉の温泉水の5日毎の搬送によるアトピー性皮膚炎患者への臨床実験や、抗アレルギー効果として二股温泉・豊富温泉および浦幌留真温泉の温泉水によるマウスの飲用実験など精力的な試みがなされてきている。なお、一連の報告は「健康科学調査研究報告書(平成7～9年度)」として別刷印刷されている(衛生研究所, 1998)。

わが国では、温泉は観光・レジャーの対象としてみられがちであり、本来温泉がもつ健康維持・回復といった保健・医療面は軽視されてきているように思われる。温泉が保養・療養など予防医学面から積極的に有効活用されるために、「温泉保健科」の調査研究成果に大いに期待したい。

筆者の属する北海道立地質研究所(1999.8.1改組;旧地下資源調査所)は同じ敷地内にあり、温泉を資源面からとらえる調査研究を行なっている。「温泉保健科」には日頃から温泉の化学的情報でお世話になっている。「研究団地」内の4機関は、同じ北海道の試験研究機関として種々の分野における共同研究ばかりではなく、スポーツ面など日々交流が行なわれている。サンダルばきで「温泉保健科」に伺い、筆者なりにまとめさせて頂いた。必ずしも衛生研究所の意にそっていないかもしれない。また、文中敬称は略させて頂いた。

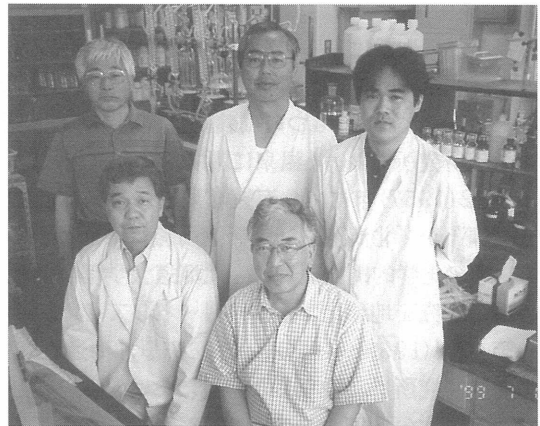


写真2 温泉保健科のスタッフ
右より 市橋研究職員, 都築前副所長, 内野温泉保健科長, 小川生活科学部長, および筆者

北海道立地質研究所
松波 武雄